

## 絶望と希望／信仰と躓きの

### 弁証法

藤井 聡

#### ソクラテス／プラトンの哲学の実践性

ソクラテス、あるいは、プラトンの哲学の影響力は、改めて指摘するまでもないほどに強大なものである。哲学者が政治の中枢を担うべきとの哲人統治説、真善美という観念の存在にまつわるイデア論、魂の不死説など、彼らの諸説は、様々な人々の考え方や生き方、あるいは、社会のあり方に、洋の東西を問わず多大な影響を及ぼし続けている。

しかしそれと同時に、ソクラテスやプラトンに対して様々な批判が繰り返されていることもまた事実である。例えば、我々が様々な対象の名を言い当て得るのはソクラテス／プラトンが言うようにイデアとの同一性を理解することによって達成されるのではなく、種々の対象間の差異を理解することを通じて達成されるのだ、という形でのイデア論の批判や、ソクラテス／プラトンが言う様な真善美を完全に感得しうる

哲人が現実的には存在し得ないという点を持つてして哲人統治説を否定する等、様々な形でソクラテス／プラトンの哲学に批判が浴びせられ続けてきている。

ただし、そうした様々な批判にさらされてもなお、ソクラテス／プラトンの哲学が未だにその輝きを失わずに現代の我々にも大きな影響を及ぼし続けているのは、彼らの究極的な目的が「正しく認識する」ということにあるのではなく、「善く生きる」ことにあるためである。彼らにとつては、「正しく認識する」ということは、「善く生きる」という目的のために副次的に必要とされたものに過ぎなかったのである。それ故、この点を踏まえ、彼らの哲学から「正しい認識」に関わる諸説のみを取り出し、「善く生きる」ための実践的志向性のみを置き去りにしたままで、それら諸説を批判したところで、彼らの哲学に傷一つ付けることすらできないのである。つまり、ソクラテス／プラトンの哲学の把握を試みるためには、仮にその「認識論」「存在論」の部分のみを理解する場合においても、「実践倫理哲学的視点」を忘れてはならないのである。

しかしながら、数限り無くあるソクラテス／プラトン批判の議論の中でも、少なくとも筆者の知りうる範囲において一つだけ、ソクラテス／プラトンの哲学に本質的な疑問を投げかける

批判がある。その批判の前においてもソクラテス／プラトンの哲学の輝きには変化が生じ得ないのではあるが、その輝きが「限られたもの」であることが示されるのである。

その本質的批判とは、キルケゴールによるキリスト教的ソクラテス／プラトン批判である。

#### キルケゴールのソクラテス／プラトン批判

キルケゴールは、「死に至る病」の中で、絶望と希望の弁証法的関係を仔細に、かつ、多面的に論ずる。その時キルケゴールが目指しているのは、ソクラテス／プラトンと同様に、あくまでも「善く生きる」ことに他ならない。そして、彼は、その目的のための準備的議論として彼自身の存在論、認識論を展開する。こうした接近法は、ソクラテス／プラトンと相似をなしていると言つことができよう。

なお、キルケゴールが論じた存在論、認識論は、例えば日本の和辻哲郎らによって踏襲され、いわゆる「日本独自の風土論」に繋がっていく。ただしその時、「善く生きる」という実践的志向性はキルケゴールの思想の中にそのまま置き去りにされ、和辻の風土論の中に取り入れられることは無かった。それ故、彼の風土論には実践性が基本的に欠如しているものであり、思想的な深みとしか言いようのない部分において、和辻

のそれとキルケゴールのそれとの間には比較にならない程の相違が存在することとなったのである。

いずれにしても、和辻らとは異なり、キルケゴールもソクラテス／プラトンも、善く生きる「ことを究極的な目標として思想を展開するのであるが、その中で、キルケゴールは、まさにその「究極的な目標」の観点から、ソクラテス／プラトンの「実践的倫理哲学としての甘さ」を指摘するのである。

キルケゴールはまず、ソクラテス／プラトンが真や善や美を認識することの困難を入念に議論していることを全面的に肯定する。しかし、真善美の認識と実践の間に横たわる深い溝についての洞察が、ソクラテス／プラトンにおいては欠落しているのではないかと批判するのである。すなわち、ソクラテス／プラトンにおいては、哲人統治説において如実に示されている様に、真善美の認識が実践へと結びつくことが想定されているのであるが、キルケゴールは、キリスト教において想定される人間の「原罪」故に、真善美を認識してもなお、意図的にその真善美に背く行動をすることすらあり得るのだと指摘する。そしてその時こそ、人間の罪はより黒い光を放ち得ることを主張する。なぜなら、人間は善に接近すればするほど、その善を否定することが可能となるのであり、それ故に、よ

り巨大な罪をなし得る「資格」を得るからである。これこそ、キルケゴールが言っているの、あるいはキリスト教で言っているの「躓(つまづ)き」の本質に他ならない。人は、神に近づけば近づくほどより大きく躓きつるのであり、善への接近はより大きな悪への接近でもあるのである。「こつした善と悪、希望と絶望、あるいは、信仰と躓きの弁証法的関係性が、「十字架」をその象徴とするキリスト教思想において明確に鮮烈に示されている一方で、ソクラテス／プラトンの哲学においてはそれほどまでの鮮烈さでもって示されていないのである。これこそ、キルケゴールがソクラテス／プラトンの哲学に差し向けた痛烈な批判に他ならない。

ただし、これまでの論旨を述べれば明らかな通り、こつしたキルケゴールの批判は、ソクラテス／プラトンの哲学を「否定」するものでは決してない。むしろ、キルケゴールはソクラテス／プラトンの哲学を全面的に肯定していると言って差し支えない。ただ、両者は現実の厳しさの理解において相違があったのである。

そつした認識の相違は、両者の暮らした地の風土の厳しさの相違によるところが大きいであろう。すなわち、ソクラテス／プラトンが生産を過ごしたギリシャの穏和な気候の地中海の「風土」と、キルケゴールが生きたデンマークの厳寒の「風土」との相違が、現実の厳しさに

ついでに認識の相違をもたらしたのであろう。そして何より、キルケゴールのキリスト教思想が生まれたのは「砂漠」であったという点も看過し得ぬ点である。つまり、絶望と希望、信仰と躓きの弁証法的関係は、地中海においてよりも、砂漠において、そして北欧の地においてより深く先鋭化せられたのである。

言つまでもなく、風土と思想との関連の議論は、和辻哲朗の得意とするところであった。この点において、和辻の指摘は正鵠を射たものだと言えよう。ただし、和辻はその弁証法的関係を彼の思想に持ち込むことをしなかった、あるいは「できなかった」のであり、それこそが、和辻の思想の本質的な欠陥なのである。そつした欠陥が和辻の思想において見られるのは、先にも指摘したように、キルケゴールが強烈に体感したであろう「善く生きる」ための厳しさを、彼が認識することができなかったからであろう。そしてさらに、和辻がそつした厳しさを認識することができなかった本質的原因は、彼の風土論に従つたら、彼が生まれ育ったのが森と石清水の風土が息づく我々が生まれ育ったこの日本であった、という点に求められることとなる。しかし、「大衆化社会」が極限にまで進行しつつある現代の日本は、森と石清水の穏やかな地というよりは、精神の焦土、あるいは、精神の砂漠とも言いうる状況にあると言つて差し支え

なからう。そうである以上、和辻の風土論は言  
うに及ばず、ソクラテス／プラトンの思想にお  
いてすら、その思想の「穏やかさ」の一点にお  
いて、我々にとつては十分な思想とはなり得な  
いのかもしれない。おそらくは、この現代の日  
本において求められているのは、例えばキルケ  
ゴールが厳寒の地で思考し尽くした、極限にま  
で絶望することを通じてはじめて弁証法的に希  
望に接近し得るといふ徹底的な厳しさをたたえ  
た思想的実践性、実践的思想性以外には、あり  
得ないのである。